



昭和45年(1970年)

9月号(No. 303)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
ヒラリー夫妻の来日……佐藤テル	1
ヒラリー夫妻を迎えて……神原達	2
富山のヒラリー夫妻……中田勇吉	3
ヒラリー夫妻との六日間……村山汀子	4
ヒラリー夫妻との富士登山……	6
ソウル大OB山岳会来日……	6
神戸登山研修所開設……	7
佐渡支部長会議感想……	8
秋田と荒巻先生……	8
図書紹介	
南アルプス・白旗史朗写真集……	3
図書室便り	
新刊図書受入報告……	8
定期刊行物受入報告……	8
洋書受入報告……	9
4月到着外国雑誌……	9
図書委員会報告……	9
会務報告	
大エベレスト展開催……	9
新旧役員懇談会……	9
ソウル大OB歓迎会……	9
第261回小集……	9
婦人懇談会報告……	9
会員異動……	10
その他	
外務省領事課からの要望……	9
都岳連からの連絡……	9
ビッケル献上の礼状……	10
日本山岳志復刻版頒布……	10

『ヒラリー夫妻の来日』

佐藤テル

昭和四十五年の一月半ば頃であった。ある偶然の機会にヒラリー夫妻を万博に招待する旨の原稿が私の机の上においてあるのを発見した。私の万博事務所における仕事は対外文書の英訳である。

丁度その頃ヒラリー夫人の友人である横浜のSさんがオーストラランドより日本に帰国し、夫人の私宛手紙を届け、そして、なんらかの機会に日本を訪問したい、その希望があることを覚えていてほしいということであった。

私は、彼女のその希望が叶えられる絶好のチャンスと思い、万博の招待だけではいくらでもない日本でも、到底山岳地帯まで足をのばす日数がない、なんとか日本山岳会と結びつけることは出来ないか……それがそもその今のヒラリー・卿夫妻招待の発端であった。

早速、当時、海外連絡委員であった松田雄一氏に連絡をとったところ、十一月に来日されればJACの招待に来るが、それ以後ではむづかしいというような話で、出鼻をくじかれてしまった想いであった。ともあれ、なんとかするのは山岳人との間の通例で、計画を煮つめていけば、途は自らひらけることは登山と大体似ているらしい。

ところで、近年は海外登山が熱病のように伝染し、JACの会員であらうとなかろうと、可成り大勢の登山人がニュー・ジブランドに出掛けては彼地の山岳会々員、その他に非常な迷惑をかけていると聞く。この際日本の山岳人の好意を少しでもわかってもらいたく、そしてあらゆる面で真の日本を知って欲しいと考えて、是非ヒラリー夫妻招待計画の実現と願ったのである。勿論、私は一九六一年以来の個人的交りであり、その頃の腕白小僧連が昨

年二月に主人や深田久弥氏と卿の自宅を訪ねた時は、礼儀正しい高校生、中学生になつていたのでにすつかり驚き、短い時間であったが飾らぬ卿夫妻の人格に、更めて魅せられた。この私の二度目の訪問は、実は彼の私共旅行者への思いやりに対する返礼でもあった。

去年の私共の一行は既に藤島敏男氏の紀行文で御承知であるが、山行組が四人、街歩き組が五人の総計九人グループであった。ガイド兼、通訳兼秘書の私は対外接渉委員でもあり、一口にいえば、なんでも屋の便利屋のような役割であるので、空手につけば、誰かしろがミセス・サトウを探してニコヤカに挨拶をしてくれる。それがみな、ニュー・ジブランド航空の幹部であり「ヒラリー卿の指図で迎えに来ました。

なにか御不自由な点はありませんか」ときいてくれる。旅先で、こんな親切な言葉をきくと大きな花束をもらうよりも嬉しくなる。

さて、松田委員はエベレストに出かけることになり、羽田のロビーで「これをお願いします」といったかどうかは知らないが、ファイルを一つ吉沢一

郎氏に渡して日本を離れてしまった。受け取った吉沢氏はなんにも分らないままにそれを引き受けたが、はて、どうしたらよいものかと、私と堀川委員へ召集がかかってきた。

「九州の阿蘇山は世界的に有名なから、そこへ御案内しよう」

「北海道へは大抵のニュー・ジブランド人が行ったから大雪山へおつれよう」

「北アルプスへも登って貰いたい」等々いろいろ案が出た。面白いことにわかれろ三人が一致したことは、「富士山はとてもきいたないから止めよう」であった。

僅かな日程で、山も湖も、旧い民家も、田舎の生活も、庭園もみてもらいたい。あれもこれもと書いては、消し、二度、三度と訂正して、最終案をカトマソのヒラリー・卿宛に送ったところ、「どうしても、日本の代表的山であるから富士山を登ってみたい」という返事が来た。

それにしてもJACは貧乏であるから卿夫妻の招待旅費はどこから捻出するか、心配であったのでせめて車だけでも無料にと老婆心から日産の重役

氏に相談をしたところ「レンタカーを出しますから、どこでも乗りすてにしてください」との返事で、足の方は解決した。

もう一度、車を使うコースをしぼり、山らしい山、混雑する日本の登山も、ありのまま富士山でみてもらおうという結論で、可成り盛沢山の行事になった。(注・立山から五箇山、高山方面は吉沢氏を通じて富士支部長中田勇吉氏その他の方々にすつかりおんぶさせて頂いてしまったその忙しい時間に、何故、浜松などに一日をさいたのか。これは少々説明を要する。

昨年ヒラリー卿を訪問する時に内外編物で二米近い彼の体格に合せて超特大のスポーツシャツを作ってくれた。それが着やすいと喜ばれたので、その工場をみてもらいたかった。序でに、日本一の楽器工場も案内し、あわよくば、彼の学校にオルガンの寄贈をうけようという魂胆があった。

日本楽器には知人、友人は一人もない。押しの一手で、東京支店長に直き談判、内外編物からの口添えも効を奏し、絶対見学させないスキー製造工程も特にヒラリー卿ながら申出たオルガンの寄贈も許されたが、卿の希望でハモニカに変更された。数量までこちらで言い出す程の心臓でないのではあはれませ。

「ヒラリー卿は六つの学校をネパールの奥地に建てておられます。その卒業生に優等賞としてハモニカを上げたといういわれがありますので……」と日本楽器の寛大なる応答を待ち望んだ。

彼等の好意は直ちに一〇打の大きなハモニカ進呈として表われ、夫妻が工場を訪問した時、その目録が笠原常務より彼の大きな手に渡され、感激の

握手の一場面はニュースとして新聞やTVに広く紹介された。

スキー工場の見学は日本楽器として非常な好意によるものであり、特にこの交渉に当られた内外編物の鈴木好征氏と日本楽器の山下勝彦氏の並々ならぬ御努力の結果であり、深く感謝している。

高山市の民家見物及び市長の歓迎、長瀬旅館のゆったりとした一夜の宿は、長瀬志づさんの好意に俟つところが多い。長瀬志づさんは私共の旧い知り合いである。

万博では世界著名名人を数名招待し、その思想、哲学、などを直接聴かせようと事業第一部テーマ課で準備し、聴衆集めに蔭の苦勞を続けておられたネームバリューの高いライシャワー博士に次いで、多くの聴衆を動員出来たのはエベレスト隊のニュースのあとばかりとはいえない。関西の山岳人の親分、四谷竜鳳氏の協力及び神戸、大阪京都のJAC支部の方々のお働きによるものと感謝している。

山と人に就いて語られたその内容は非常に感銘深く、講演後数日間、京都に遊び、大阪、富山以後は吉沢副会長にお願いし、浜松、東京は私が御一緒に、御夫妻の山岳人としての人格にふれることの出来たのは洵に幸いであつた。

夫妻は、いつでもVIP (Very Important People) 扱いを蒙る、「私共はA.O.D. (Very Ordinary people) ですよ」といつでもニヤカに、誰とも友達になつておられた。注記・テルさんには、ご主人をなくされた直後に拘わらずいろいろご面倒をかけてしまった。皆さんに代つてここに厚く御礼申上げる。(吉沢)

ヒラリー卿夫妻を 迎えて

神 原 達

エベレスト峰初登頂者のニュー・ジブランドのエドマンド・ヒラリー卿は夫人を伴い、去る七月十六日夜、日本航空七七二便で羽田に到着した。当会からは空港に三田会長、松方前会長、佐藤テル、神原達が出迎えた。

同御夫妻の来日は日本万国博覧会協会の招待によるもので、千里山の万博会場で特別講演を行なうためであるが、当会でもその後の二週間ほどを日本の山々その他へ案内することになっていたのである。翌十七日には宿舎帝国ホテルにて吉沢一郎副会長などと共に滞り中の日程などを打合せたあとで、佐藤さん、山崎社を訪ねた。午後は万博協会の案内で浅草見物をした。翌十八日に空路大阪に向い、万博協会のアレングによるロイヤル・ホテルに投宿。午後二時から一時間万博会場において記者会見を行なった。

十九日(日)の万博会場における講演は「山と人」と題するもので、午前十時半、鈴木万博事務総長の挨拶で始まり同卿が自から写したカラー・スライドとともにニュー・ジブランド、ヒマラヤ、また南極における同卿の活躍ぶりがそのおいたから始めて約一時間半話された。桑原武夫氏の紹介ののち、同時通訳のその講演は約三〇〇名の聴衆に対して大きな感銘を与えたようである。

「富士登山・箱根の旅」

浜松から自動車で河口湖の富士ビュ

ーホテルに到着したヒラリー卿夫妻は、翌七月二十九日に富士山に登った。旅の疲れも見せず、当日晴天の富士山に、東京から向った神崎忠雄、川井耿子、山口節子など若い会員ばかり十五名ほどと一緒に、また開発銀行の山岳部の人たちが三名も同行してくれた。午前七時半にスバルラインを経て神原が五合目まで案内し、九時に登山を開始した。

NHKの富士吉田支局の人たちがテレビ用のフィルムを写していたが、当日の夜のニュースでその登山は全国に放映された。立山でもそうであったが、日本の山々が観光資本によって破壊され、ゴミの山となつていく様子を嘆き、そのことが日本人の外人コンプレックスと結びつけられヒラリーが「山がきたない」と云つた」ということで日本の山がいくらでもきれいな山になれば、それは私たちのささやかな目的が達成されたことになる。現にスバルラインの終点の店屋の集まるそうぞうしい駐車場附近にも、山梨県の清浄車が早速出動していた。

その日の午後無事下山した一行は、再び自動車で帰京組と分れ、ヒラリー卿夫妻は神原とともに乙女峠を経て箱根に向つた。強羅の環翠楼にて三田会長が待つておられ、テンジン・ノルケイも泊つたという和室に入り、温泉で汗を流した。

翌三十日早朝、神原が運転する車で同卿夫妻は三田会長とともに小田原から湘南廻りで東京に向つた。日本の山々を巡つて再び大都会東京に第三京浜のハイウェイを飛ばして近づく、空の色が次第にドンヨリとニゴリはじめ、「コンクリート・ジャングルに帰ってきた」とヒラリー卿もガッカリする。東京では渋谷、神山町のニュー・ジブランド大使の官邸に投宿した。

ふるさととの山

中村 謙著

— 上信越国境を歩む —

戦前からの登山家は、ガイド・ブックの嚆矢であり、名著であった「上越の山と溪」「上信越の山々」を一度は繙いたであろう。古稀の祝いに山行一千回を記念した著者快心の近著。

A5判 四二二頁 地図二六頁 写真一二頁 定価 八〇〇円 送料 一一〇円

- 次 上越の山 尾瀬、平ヶ岳、大水上山、兎岳、銀山平、荒沢岳、越後三山、小沢岳、下津川山、金城山、飯土山、浅草岳、守門山、武蔵山、巻機山、朝日岳、笠ヶ岳、七ツ小屋山、大源太山、谷川連峰、三國峠以西の山
- 信越の山 野反池、白砂山、赤石山、岩倉山、鳥山、苗場山、米山、関田山脈、北信三山、笹ヶ峰牧場、妙高山、火打山、金北山から金剛山、虫崎から外海府。
- 佐渡の山 伝説

越後の国境

— 新潟県境全縦走踏査登山の記録 —

新潟県は山形・福島・群馬・長野・富山に隣接して二〇〇〇米前後の山々に囲まれている。日本山岳会越後支部創立二〇周年記念事業として完遂し、新潟日報社文化賞を授与された。

A5判 五三八頁 地図一〇頁 写真一七頁 定価 一五〇〇円 送料 一一〇円

- 踏査期間 昭和四十一年三月〜五月
残雪期を中心とした約二二日
参加団体 県内外登山団体五三団体
踏査隊員五五八名、延員一八五六名
構 断面六八・九軒
内 容 踏査報告、時間記録、踏査地図、人文、地質、動物、植物、気象、観光、岳登山施設、山岳語彙、隊員名簿、踏査計画書、踏査登山の手引き

後援 新潟県、新潟日報社、関係市町村

◎直接新潟富士波出版社へご注文下さい。
(日本山岳会事務局でも委託販売しています)
発行所 株式会社 富士波出版 社
〒951 新潟市学校町二番町五九八
郵便振替口座 新潟二七四番
電話 〇二五二一八八八五

富山の……… …ヒラリー卿… …夫妻…

富山支部長
中田 勇吉



クラブハウス前庭見晴台にて NZ 国旗がひるがえる

吉沢副会長から再度の交渉があつて最後にまとまつた案は、四泊五日の富山旅行であつた。万博を別にして日本滞在日数の約半分である。

この好意、この名譽に報いるには如何にすればよいか。責任は重い。兎に角、ゆくり遊ばせて上げたいという気持ちに全部に盛り込んでプランを立てた。

世界の寵児として有名な彼である。何処へ行つても最高のもてようはよいとして、なんとそれを利用する人々の多いことか。新聞に、ラジオに、そして

こうした日本人の悪い一面を出来るだけカバーしようと考えた。まずアート・ホームということから、視察よりも休息を主にしようとした。特に夫人の接待に意を用い、海外生活の経験(シアトルに一年留学)のある女性(富山在住の村山汀子嬢)を特に差し加えた。幸い天候に恵まれ、五日間の旅は上々であつたらしい。

七月三十日、如水会館の歓迎会に行く前に、本部ルームで夫人に記念アルバムを差上げた時の喜びよう、そして歓迎会の席上、ヒラリー卿の挨拶の中に、富山の印象や私の名を特別感謝の表現で発表されたことなど思い合せ、自分の念願が幾分でも叶えられたことを喜ぶと同時に、自分が気にしていた日本人の悪い一面を一層深刻な思いで反省させられたのであつた。

日程の概況
七月二十二日(水)午後一時五十九分、富山着
特急電号で、お二人は吉沢副会長と共に大阪より元気に到着。



クラブハウス(富山々々)内にて
右から 若林委員長
吉沢副会長
ヒラリー卿
ルイス夫人
中田支部長

富山県知事代理出納長(注・知事は東京出張中、幸吉氏は勇吉氏の弟)や若林支部委員長等と共に出迎える。駅長室で少憩の後、富山市民芸館に行く。呉羽山麓の本館前には、安川館長心入れの白麻の「のれん」がひるがえり、和服姿の知事夫人の出迎えと共に、日本調溢れるうちに館内へ入る。本館の建物や陳列品の美しさに眼を瞠はる夫妻の表情もまたさながら、合掌館の「いろいろ」端で催された知事夫人の抹茶の接待は、何よりも深い印象を与えたことであらう。

約一時間の後、支部員の待つ、峰続きのクラブ・ハウス、富山々々に向う。前庭の見晴し台に「ペンボン」と翻えるニュー・ジブラの国旗を卿はしばし、感慨深げに見上げた後、支部員一同は約十分間挨拶を行なった。又、荘内には記念品(獅子頭とハンドバッグ)贈呈などで、一層賑やかさが盛り上がる。

約一時間の歓談、そして記念撮影ののち富山駅に引返し、十六時二十分発の電車で立山に向う。案内役に加わつた若林啓介君(若林支部委員長の令息、海外留学の直前であつた)の登山靴など話題の中心に、和気あいあいのうちに十七時十六分立山駅着。

駅頭には丁度研修所に滞在中の横有恒氏や小方弘弘氏などが出迎えられ、堅い握手が交わされた。間もなく千寿ヶ原の国立登山研修所に到着。井上所長の案内で場内を隈なく見学。

折しも受講中の全国高校指導員に約三十分間、ヒラリー卿の記念講演(注・吉沢副会長通訳)があつた後、近くの杉田屋に設けられた歓迎晩餐会に赴く。横さん何かと気を配られていた。それから研修所に引返し、富山の第一夜が終る。

七月二十三日(木)快晴、七時半朝食。ここに出されたパンは、前後わざわざ富山へ買出しに行き、本早朝食卓のぼたものである。日本山岳会女性会員、浜田みつ子夫人、田中美和子夫人の接待に感謝しつつ一同出発。八時二十分のケーブルで美女平へと向つた。

注記・富山支部長中田勇吉氏、同委員長若林啓之介氏、そして支部員であり富山高橋休連の委員長である石坂久忠氏その他の方々にも物心両面で大変なお世話になった。深謝。(吉沢)

◆南アルプス◆

白旗史朗写真集
文〳上田哲農

朝日新聞社刊

登山家でカメラマンの白旗君が岡田紅陽氏に五年も師事していたとは知らなかった。それからあらぬ彼の写真には素人の私にも何か紅陽氏の作品と共通した悠容迫らぬ落着きといううか大らかさが感じられるのである。

白旗君は「南アルプス」はこれからの山だ。深い神秘と限りない魅力をあわせ持つ山塊である。」と述べ、文の方を書いている上田さんもそれに同感の意を表し、それをきっかけとしてわれわれの前に垣々とした名文を展開されている。

上田さんは人も知る日展の審査員、われわれには「日露の山、ひなたの山」その他で、親しい又尊敬している登山家の一人である。

南アルプスと北アルプスは上田さんの前記の本の題名と同じように私には感じられているが、本当に奥深い山としては日本ばかりでなく世界にも珍らしい地域ではないかと思う。

北アルプスが資本家の食欲に浸蝕されつつある現在でも、南アルプスの大部分は今なお、白旗君のいうように「神秘と魅力」を多分に残している。大なる山塊であることは嬉しい。

白旗君はこの山塊を四季を通じ、非情な自然の脅威に抗して北の端から南の端までよく歩きまわねばって、その良さを洗練されたカメラの眼をもってわれわれの前に見せてくれた。単なる写真家だけではないことはこの作品だけを見てもわかるのである。最近彼のマカールの写真を見たが、あの眼の鋭さがこの「南アルプス」にもよく現われている。(Y)

昭和四五年八月刊、朝日新聞社、定価三八〇〇円。

女性からみた ヒラリー卿との六日間

富山から高山へ

村山 亨子



富山々々
への道すがら
ら呉羽山の
草木の緑一
色に喜び、
ヒラリー夫
人は「こう
いう所に来
たかった」と何
度も繰り返し、
車を降りてから
も「さすが山岳
会の小屋だけあ
って立派です
ね」という。風
邪のため、少し
息切れがするとい

トホームに降り立
ったエドマンド・ヒラリー卿は予想以
上に柔和な、その笑顔の中の人柄に解
け込むような何かを感じられる人であ
った。そして又夫人の飾り気ない雰
気にも安堵を覚え、私を縛り付けてい
たすべての不安が一挙に解決されたよ
うに思われた。

「今日は珍らしく朝から山々が見え
て」と話すと、いかにも嬉しそうに
立山連峯を見やりながら「それは運が
良かった」とヒラリー卿の言葉。ヒラ
リー夫人に「山登りはタフなほうで
すか？」と尋ねると、それ程強くないと
いう。私は弱心から心配し続けてきま
したが「という、ヒラリー卿は「大
丈夫、心配しないで」と励まして下さ
った。

民芸館で抹茶と月世界(富山の名菓)
のもてなしをうけると、お二人とも美
味しいお菓子だと感心し、中田支部長
のドライ・マッシュルームという説明に、
ヒラリー夫人は材料は何であるかと質
問。ヒラリー卿は茶室、客間の掛軸に
興味をもち、その言葉の意味するもの
等を尋ねる。

「仕事は？」の質問に対して「養蜂
業は現在、兄弟にまかせ、他の活動に
専念しているが、それでも、心は農夫
の俣です」と語る。印象的に感じた。
千寿ヶ原までの車中は和やかで楽し
いものであった。合流した若林君(注
・支部委員長の息)のA・F・S留学
のことや、彼の真新しい登山靴を手
にとり「非常に立派な物だ」といってほ
めていた。

立山駅まで出迎えた横有恒氏と大喜
びの握手をかわす。側でみている者も
嬉しくなるようなシーンであった。
文部省登山研修所の周囲の杉林をみ
て「日本の杉は実に美しい」とほめた
たえていた。
杉田屋の夕食会ではホテルイカの燻
製をみて大変小さなイカであると珍ら

しがり、又味わってからビールのつま
みによいですねともいった。これは海
中でホテルのように発光する富山湾特
産のものであると説明すると大変驚き
の眼で見つめていた。
明けて二十三日、美女平のバス発着
所で「皆の登山姿に比べ、われわれは
海岸にでも出かけるような格好である
とヒラリー夫人、暑い陽射しにもかか
わらず、お二人とも無帽である。案じ
て、それをいうと、ほとんど帽子をか
ぶることがないという。ネパールのキ
ャラパンでも、かぶらなかつた」と……
ヒラリー夫人は帽子をかぶっても鼻だ
け外へ出てしまつて赤くなるからと笑
いながら陽焼け止めクリームを鼻頭
に、ヒラリー卿にもクリームを与える
と、彼もまた申し訳程度に鼻頭にこ
すりつけていた。
バスから眺められる山々を吉沢さん
が説明する。どれもこれも四十年前、
四十五年前に登つたという註釈つきで
……一郎氏がそれをいう前に、ち



立山で笑うエドとイチロウ

pass ago」といわれて「一郎はその当
時ほど多忙であつたにちがいない」と
ヒラリー卿が笑う。
室堂のバスターミナル、トンネル工
事の状態には、非常に情ないといった
様子でモーターゼイションの山々への
進出を嘆いていた。
一の越までの道で、数多くの小学生
と会う。口々に「ガンバッテ！」と呼
びかける。その声に、どういう意味か
と尋ね、声をかけられる度に「コンニ
チワ」と独特のイントネーションで笑
いかえすお二人である。一の越に着い
た「酸素ボンベ無用のコルである」と
いう吉沢さんの言葉に一同大笑いをす
る。
ヒラリー夫人は暖簾を見つけ、たち
まち質問せめにあつてしまふ。夫人の
時折の咳を気にすると、軽い風邪をひ
いていたのだが、大阪の空気と異なり、
立山の空気は新鮮で、何よりの薬だ、
喉をいやしてくれと話し、彼女は数
日前に比べ、よくなつていく。と語つ
ていた。

EXPO、大阪の喧騒から脱し、古
巣に戻つたように嬉しそうであつた。
夫人は岩に咲く、小さな「すみれ」に
も歓喜をあげ、ヒラリー卿を呼び止め
て笑ひげである。が余りの登山者の多
さには驚いたらしく、ヒラリー卿は
「今やっ日本の登山者が海外の山登
りに出かけるのが理解出来た」と話し
ていた。

ヒラリー夫人は人の登る雄山ルート
より、人気のない西の方の浄土や東一
の越あたりを見て、何処へ行くルート
かと質問し、先の方に魅せられていた
ようであつた。

ヒラリーさんの話では、ニュー・
ジランドでも原住民のマオリ族が、
山を雪山としてあがめる風習があり、
代々部族の長など、身分の高い者を山
の頂に葬つたという。又故国では山へ

のアプローチが長く、シーズンに入山
するパーティーは数える程で、時には全
く入山者のない年もある。と語ってい
た。雄山に着いたら「ああ、これで天
国に行けるかな」と冗談をとばす卿で
もあつた。

大汝の途中、レディの新しいシェ
ーズは足を痛めはしませんかと問う
と、少し具合が悪い、岩から岩へうつ
る時、バランスを失ひがちだと返事
が返る。ローローという声がきこえ
てくる。ヒマラヤでは普通の運動靴で
相当の距離を歩いたことがあると語
る。「御子様達はきつと淋しがって
いられるでしょう」というと「母が近く
に住んでいて、日に何度もやって来て
世話をやいてくれるから、何の心配も
いらない」と微笑んでいた。

前方から何か異様な掛声が聞こえて
来たが、それが自らを励ます声である
ことを知り、その大きな荷物と彼等
のいでたちとも合わせて、全く呆れ果て
た様子であつた。登山者の一人が「あ
の人が本当のヒラリーさん? あんな簡
素な服装で、まさか……」といってい
るのを耳にしましたか」といって
く、あんな格好で歩きます。むこうの
山で常こんな姿で登山しましたが、
ある登山家達が「その若い人、そん
な格好ではこれから先、まかりならん」と
いひわたしたたそうです。それがエベ
レスト登頂の三月月後のことなんでは
す」と。剣沢を眼下にし、そこに張ら
れたテント村を夫人に指し、さも懐し
そうに見入る。

雪溪から近道して剣沢小屋に着いた
剣沢小屋で一休み、本年度の秀れた
三つのヒマラヤ遠征隊をあげ、小規模
性の故をも併せ強調してあげ、又ニ
ュー・ジランドでは国立公園の保護
地域の中に、さらにまたいかなる建造
物、施設、設備も許可されない地域を

設け、原始のままに放置しておく地帯を定め、自然保護を厳重にしていると言った。

「今までに日本を訪れたどの旅行者からも北海道は行くべき良いところだと聞いています。今度の冬季オリンピックに子供達を連れて再び日本に来たい。大きなホテルよりテントをもって来た方がよいだろう」と話していた。時がたつにつれて吉沢氏は「お二人のなれそめは？」との答えは「ニュー・ジブラント山岳会の前会長がルイズの父であり、ある日、彼が会長宅を訪ねたところ、娘さんに出逢った。それが、そもその始まりである」と。

剣沢前進基地での夜は、日本における公害問題に耳を傾ける。日本の登山隊にスポンサーがつくことを聞き面白がついて「日本は金持ちだからなあ」と、是非合同登山を計画しよう。勿論あなた方が費用を全部もって……」と笑う。

二十四日の朝、外に出てみて基地の小屋がよい場所に建てられていると感心し、又小屋の屋根に幾多の針が出ているのを見て何のためかかと質問する。石坂さんの「かわら止め」だとの答えに、かけ登って調べてみた。本当によく気がつくものだ。私など屋根の上など見もしないのにという「夫は山の建物に大きな関心を寄せているから」とのことであった。

朝食の「日本のリプトンティは美味しいのだから」とおかわりをはにかみながら三杯、その間に剣沢小屋の友部さんから暖簾をプレゼントされ大喜びであった。

剣沢前までの登りに「Downhill」は元気がいい？（私につけてくれたニクネム）と後をふり返って声をかける。大きなゲレンと記念碑の前ではわれわれに「シエルバ

これで天国へ行けるかな（雄山神社にて）

写真は三葉とも朝日新聞社提供



はこうした石塚をみると、必ず石廻りに廻って祈りを捧げる」と教えて下さる。ローローと呼び出す（シエルバの言葉でいそげいそげ）。立山連峰ホテルの前で、文部省登山研修受講生と共に登って来られた横氏に再会、無事を祈って別れた。美女平ロッジで美味しいビールを指さして、「もしやニュー・ジブラントの牛ではないか」と冗談をいいながら満足そうに食べていた。野島氏の写真をみて、秋や冬の立山一帯を再認識なさったようであった。帰りの車中で、ノートを取り出し「ガンパッテ」「ソバ」「ノレン」「オゲンキデ」等をメモし、食堂で記者の一人が立ち喰い「ソバ」をフウフウいって食べていたのを見たという。下界は暑く、今夜は温泉だと知ると大喜びである。小牧からの船が特別に出されたものであることを知って「行く先々時間的

にも、非常に無理なく旅程がくまれていると感心し、大変な好意を示されている。と中田氏、そしてO.H. Leader（石坂先生）に対する感謝の言葉をこの後もよく耳にした。大牧での夕食も、鯉の生け作り等の素晴らしいテーブルに驚き、帰って子供達や友人に見せてやりたいと食卓の写真を撮りまくる。又初めてだと思っ食物を女性には珍らしいほど勇敢に試そうとし、口にするヒラリー夫人を私は素晴らしい人だと思った。石坂先生が出した羊かんを美味しくいただいたお二人。二十五日、朝のコーヒを届けると「とても静かなところで、本当に心からゆっくり出来た。よい宿を有難う」といわれる。

人工湖上の空気をすって、井波の横山一夢氏の製作場では、お弟子さん達のみごと腕に感心し、その後門前町である井波の通りをお寺まで嬉しそうにブラブラ歩き、運よく太子伝の法要の日につかて露店のさまざまな商品に眼を見張り、大工道具を見つけて、あれこれと吟味、あなたには今必要ないはずですよ」と告められ、山と積まれた瀬戸物に、心が動いていた様子「素敵なものが沢山あるけど、こういう店は安いのでしょ」という。瑞泉寺の山門が美しいと讚美するヒラリーさん。寺の紋章を型とった紅白の菓子を「美しい特別な物だから子供達に」と大切に包み直してバッグにおさめる夫人。本堂にそして境内に溢れる老いたの善男善女の群に「見たいと思ってた本当の日本の顔の一面がここにあった」と夫人は聡明な瞳を輝かせ、宝物殿の

立派な内容に感嘆してお布施を申し出るヒラリーさん。相ノ倉での昼食に「またたび」が出た。「猫が酔うなら、人間はどうなるか？」と話しがはすむ。この土地の養蚕を聞き、飼育法等興味深げである。ダイを訪れた時、あちらの養蚕を見学したことがあってそれと比較していた。「五箇山」に今まで外国からの旅人が訪れているかと尋ね、ほんとうにいいとわかる。「こんな美しい山村を旅行者は一度は見に来なければならぬ。それにつけても、富山県が英文のパンフレットをもっていないのはわれわれにとつて残念なことであると語る腰の曲がった老婆に会い「どうしてあのようになったのか重労働のため？」と。興味をもった美しい日本の紙「和紙」の製造法を映画で見ることが出来、又O.H. Leaderの石坂先生から「コウゾ」を手に入れた貰い、これで国に帰って講演する際によい材料があり助かったと嬉しそうであった。赤尾旅館に到着きO.H. Leaderから筑子の楽器をプレゼントされ喜び、すぐさま楽譜を読んでメロディを口ずさむ。その速さと正確さにすっかり驚いたという、ヒラリーさんは笑いなから「彼女は音楽家だったから、ニュー・ジブラントのオーケストラのピオラ奏者でした」と語る。「家では子供達も楽器を奏するのが好きで、よい土産が出来た。帰国したら早速これを使って大喜びするだろう」とヒラリー夫人。

ヒラリーさんはことのほか醤油が気に入って、お二人共にトンカツにまで醤油、そして味をしめたお茶漬をサラサラと、じつに楽しそうである。今日は高山泊りである。白山を見せあげようとしてコースを更にしたがわれわれのリーダーだった。天竺峠へ、その道中種々の植物を車を止めては「これが昨日食べた○○、これが△△、との教授に「日本人は何て賢いのだろう。まるで山の草木全部が食べられたり、葉になったり、紙になるようだ」と感心する。御母衣ダム以後は長いジブの旅であった。しばしば植物の話が続いた時に、ヒラリー夫人の父上が植物学者で、ニュー・ジブラントでは常緑樹が巾をかかしていること、白樺は輸入され観賞用として庭にみられること等を聞き、又日本映画は見れないが、T・Vで「サムライ」「ニンジャ」の面白いプログラムがあり、大衆人気があって「英語を上手にしゃべるサムライでしようね」と大笑いした。われわれの歌のおかしさに、マオリのフォークソングを御夫妻で歌い、私がハワイを旅したことを知っていたヒラリーさんはボリネシャに広く伝わっている「別れの歌」を「きつと聞いたことがあるはず」といって歌い始め、南極に出発する時、人々が元気のよい励ましの歌を唱ってくればよいものを、この哀しい「別れの歌」を皆んなで歌ったので、聞いていてとても辛くなってしまったと笑いながら話す。道路工事のための交通制限告知板めぐり、しばらく停車していた時、一人でコーラを飲み店をさがすという。私が買ってきますという「私は男だ、一人でやれるから大丈夫」と扇子片手に出かけてしまう。「なかなか帰ってこないの、きつとうまくなって飲んでいいのでしょ」とヒラリー夫人。店の人はさぞびっくりして、ドギマギするだろうと、二人は姿の消えた方を一生懸命に見ていると、当のご本人が扇子をユラユラさせながらこどもなげにもどって来る。「コカコーラ」といって、百円出したら、おつりをくれて「アリガトO.Z.A」とかなんとかいって、ちゃ

んと通じて、何でもなかったよ」と大きなヒラリー卿は狭いジープから出て仕合わせそうであった。

高山の長瀬旅館は博物館みたいだと珍重し、部屋もよいと気に入った様子、手渡された英文パンフレットを手助けになると喜び、「富士山も是非外国人旅行者のために英文パンフレットを考えてほしい」「もっとも富士山の人々は、大きな太った外国人達が入り込んで来るのを好まないのかもしれないなあ」と冗談が出る。

高山の飛騨山岳会のレセプションではプレゼンに「一位の雷鳥」を受け、「立山ではとうとう雷鳥を見なかったが、これでどんな鳥だか解った」と話しノットにまた「[LACHO]」等と書き込む。

「朝市には一郎が早起きだから起こしてもらおう」と、帰途は歩く方がよいからと宿までゆっくり散歩を楽しみ、安い氷水を呑んだ。

二十七日 朝市はやはり物珍らしく、新鮮な果物や野菜に眼を細め、桃を求めて皮ごと丸かじりをし、唐蜀黍を美味しい美味しいと、まだ醒めやらぬ町中を嬉しそうに食べながら歩いた。屋台会館では屋台の立派さに感嘆し、お土産にと渡された高山祭のポスターを喜んで受け取り、小京都と呼ばれる古い屋並を残す高山の町を離れて、少くなくともあと三日間は滞在して歩きたいというお二人であった。

注記・村山汀子さんはルイズ・ヒラリー付きの通訳として富士山、立山、高山と同行。中田勇吉氏の配慮によるものである。下りになると元気が出てくるものだから、ヒラリーからダウンヒル・タイガーという尊称をもらった。優しい人柄はルイズさんにもすっかり気に入られ、旅を一層楽しいものにしてくれた。

(吉沢)

妻の富士山 とヒラリー 山口節子

富士山に登られるヒラリーご夫妻のお伴をすることになって、七月二十八日午後、暑いさなかの東京をあとに、神原さんご夫妻、川井耿子さん、私の四人は河口湖へむかいました。フジビュー・ホテルのロビーで浜松をご案内していらした佐藤テル、鈴木郭之さんからバトンタッチ。握手したヒラリーさんの手は大きくてあたったかかったです。

翌二十九日、昨夕おそく到着した山寺さんの一行三名、それから早朝車をとばしてきた神崎さんのパーティが合流して、吉田口五合目を登り始めたのが九時であった。

ヒラリーさんのいでは、五合目で買った四〇〇円のビニールの陽除け帽子、長袖シャツを腕まくりしてショートパンツにズック靴、そして肩から航空会社のカバンをにかけていっしょにヒラリー夫人も同じじつばの帽子に袖なしのブラウス、ショートパンツの腰にセーターをくるっと巻いてキャラバンシューズの軽装だ。おまけに五合目ではスイートコーンを買って「歩きながらコーンを食べるのはむづかしいですね」なんてかじりながら歩いていらした。九合目あたりで私がおくれをとったのはコーンのハンディかな。ニュー・ジラランドの夏山ではかなり高いところまでショートパンツで歩く。暑いし、天候が変り易くて雨が多くなる。その上渡渉が多いからで、同じような日本の夏山で何故厚いウールのシャツやズボンを着るのでしょう、と不思議そうにおっしゃる。しかし今日のわがパーティは断然ショートパンツに表わら帽が多い。地下足袋もチラ

ホラいて、「ジャパニーズオールドクライミングシューズ」なんて、いっしょにいい説明している。さういふ、すばらしい天気で、遠くの山こそ見えないが駿河湾が光っている。登るにつれて涼しい風が吹いて汗もあまりかかない。何よりも人の少ないのが助かった。この前の日曜の夕刊で、山頂まで延々と続く人の列を見てうんざりしていたのだが、今日はさほどではない。(従ってヒラリーご夫妻は、私たちが散々説明したことかと誤解されたかも知れない)。登ってくる人も下ってくる人も家族連れが多く、夏の富士山がいかに庶民的な山であるかがよくわかる。小屋の近くにはゴミを集めた大きなビニール袋がいくつもおいであつたが、それでもガラス瓶の破片やゴミが散らかり、トイレの匂いが鼻をつくの、小屋を通過するときは日本人としては大変困り、大いそぎでビツチをあげた。

遠いですが、とおっしゃりながらかなりのビツチで登り続けたので、本八合をすぎ九合目にかかる頃から日頃トレーニング不足の私はすっかりしごかれてしまつて、頂上で待って下さあい」と叫んで休み休み登った。ところが頂上に着いてみると先着のパーティがみつからない。どっちを廻るのが打ち合わせでいかなかったのか、おくれをとった四、五人が吉田口の頂上で一行を待った。ヒラリーさんたちは剣ヶ峰の陽だまりで食事をして歌が出る程の気温で午後三時に吉田口にもどつていらした。頂上で、ヒラリーさんの金剛杖についた日の丸にサインする。(日の丸には JAPAN-NEW ZEALAND MT. FUJI EXPEDITION と書いてあった。)

下りは同じ吉田口をみながら歌いながらジグザグに下る。途中で会員の油谷、宮崎さんに会った。お二人は「ホテル前を九時出発」という会報の通知通り見えたため頂上まで行けずに途中で待っていて下さったもので、それから六合までは十数名が駆けおけるものうたる砂けむりで、その辺一帯は何も見えなくなった。目も口もあけられない。ヒラリーさんは、あの長い脚でとぶようにおりてしまわれた。ヒラリー夫人もすぐスピードで、あつたうまに六合に着いてしまつた。靴も靴下も大小の石や砂がすきまなく入り込んでいるし、みんなの顔は汗と砂の中に目ばかりキョロキョロして見られたものではない。気のきいた人が、もう

韓国ソウル大学校文理科大学OB山岳会 海外連絡委員会

ソウル大学校文理科大学OB山岳会の一行九名が、本会の招請により、去る六月十七日(来日)、富士山、南アルプス、北アルプスに登山のち、七月十二日全員無事、帰国した。

一行は、すでに本会になじみの深い孫慶錫氏に率いられた、李敦寧、孔応大、李載仁、金成起、李楷奎、禹錫勲、辛東午、趙慶石の各氏で、いづれも、二十代後から三十代の現役で、南アルプスおよび富士山登山のため山梨県谷、屏風岩でロッククライミングなど、非常に元氣なところをみせ、日本の山を充分、楽しんだ。

折しも、梅雨の最中ではあったが幸い晴天にも恵まれ、七月七日には全員、東京に姿を現われ、七月十日には本会ルームで行った歓送パーティに出席した。

最近、わが国から韓国へ出掛ける人は非常に増加している。本会海外連絡会が判っているだけでも、一九六八年立命館大学山岳部外七隊、一九六九

いらなくなった水筒の水で手を洗わせて下さる。そしてヒラリーさんにジュースをごちそうになって、今度はゆっくりと五合目になった。

ヒラリーご夫妻は五合目からそのまゝ、三田さんが待っていていらした箱根へむかわれた。

ヒラリーご夫妻と登った富士山は本当に楽しかった。これは今日こいっしよした全員の見解である。「サー・ヒラリー」ではなく、「ヒラリーさん」と、つい、お呼びしてしまう。お二人ともすばらしく魅力的な方である。

ヒラリー卿関係の記事は次号にも続く予定です。(吉沢)

年度、東京外語大WV外五隊の多きにのぼっている。一方、韓国側から訪日する隊は、韓国の出国の困難さ故か、非常に少く、過去五年間に今度の隊が初めてである。

日韓両国の国交正常化に伴って、両国登山愛好者の交流がますます盛んになり、両国の親善に寄与することを改めて望みたい。

なお、今回の訪日隊の招請に当っては、甲府市在の会員百瀬舜太郎氏のご努力に負うところが大きかった。南アルプスおよび富士山登山のため山梨県に滞在した十日間は、同氏を始めとするオール甲府ライオンズクラブ、大韓民国居留民団山梨県本部、山梨県山岳連盟の多くの方が、訪日隊のお世話に当たったことを附記しておきたい。

(関口周也)

◎七月十日日本会主催歓迎パーティ出席者。折井健一、山崎安治、関口周也、藤井運平、諸岡一、織内信彦、深田久弥、城山正三、神原達、日高信六郎、黄田克昭、梅崎正則、網藏志朗、中山芳郎、小勝博道、神崎忠男、吉沢一郎、鈴木郭之、堀川英司郎、

(敬称略)

神戸登山研修所開設

前田 浩

山登りの仲間というものは、寄り集って、山の話だけでなく、世間話でもなんでも気楽に話し合えるところがあると、今度はあの山に行ってみよう、どうだい誰か一緒に行かないか？といううなムードが自然に生れてくるものである。戦前から戦後にかけて、神戸でそんな世話役をしてくれた人は、初代の神戸好日山荘主人、故島田真之介さんであった。

戦後に誕生した兵庫県山岳連盟の組織も、そうしたムードが背景にあった。近年の登山ブームと共に、連盟に加盟する団体も、だんだん数も増え、発足当時は殆どが神戸中心の団体ばかりであったのが、阪神間をはじめ姫路方面を中心とした播磨地域にも拡がっていった。

こうした団体はいろいろな職業の会員で構成する地域中心の団体、職場の団体、学校を中心とする団体、加えて神戸独特の古い歴史をもつ六甲山系の登山を主とする毎日登山の団体などあって、誠にバラエティに富んだ構成メンバーであり、この連盟の運営は多様な性格の団体が協調して、侵すことなく、共通の問題をとらえて処理していくというのが本来の目的に合うことでもあろう。従って一つの物事を決めて実行するのも、相談、会議という機会を数多くもたねばならないのは、やむをえないことで、このあたりの運営のむづかしさは、〇〇山岳会という単一登山団体とは違ったところであろう。

とに角、連盟の運営のためには、しばしば会合を催さねばならない。この会場探しには全く泣かされたというのであった。幹事役を引受けた者は誰でも、

ルームがあればよいなあーという気持ちを持ったものである。

三年前の春、連盟ではじめて、アラスカに登山隊を送った。混成十六名の隊長を送ったあと、七期、十四年間、会長を引き受けられた津田周二氏は名誉会長に退き、アラスカ登山隊の団長を引き上げて、ベースキャンプまで行かれた宮崎辰雄氏（当時神戸市助役）が会長職を引き継がれた。

こうした時期に、山岳連盟の次の仕事として「山岳会館」の建設という声が生り上ってきたのは、タイミングとしてまことに適切であったと、今にして思われるのである。

初めは、元お茶の水にあったJACのルームくらしいものを神戸市内の公園の一隅に建てさせて貰えないだろうか？建設費も六〇〇万円位の木造二階建のものを、と考えて、スケッチを画いたのは四十三年の早春の頃であった。五月の定時総会では、工費、一千万円の予算での建設計画を発表して、出席者の拍手裡に可決され、具体的準備にはいった。

はじめは場所探しであるが、土地代金は予算に計上してないので、神戸市有地を賃して貰う積りである。これは仲々簡単な訳にはいかぬことが判ったのであるが、最終的には、土地は賃して貰う代わり、永久建築の建物を建てて、市に寄付をする、ということにした。従って建物は公共的な性格をもつ内容となり、一番はじめに考えた、クラブルームのような考えからは大分違ったものになったのは、やむをえないと思っている。そんな次第で、名称も「登山研修所」というような堅苦しいものに落ちついた。この名称には津田さんから、どうも感心せん、な、といわれたが、どうにもよい考えが浮ばないまま、神戸登山研修所、ということに落ち着いた。

その後、一年余りの準備期間を経て、最終的には、建築物は、本館三階建、別館二階建、シャワー棟を付属させ、建築延面積 五八二平方m（一七六坪）

工 費 四、一〇〇万円
内部設備費 四〇〇万円
合 計 四、五〇〇万円

といううな大きなものになった。建物の内部は、一階は、展示室（ホテルというロビーに相当）事務所、図書閲覧室、図書資料室、二階は、集会室、別館（二）応接室、三階は大集会室、別館は一階に集会室と宿直室、二階はトレーニングルームを設ける。この外、本館の東側に石垣と建物を併せ利用して高さ、一七・七m、幅一〇mのコンクリート造りの人工岩場を併設して、岩登りの練習ができるような設備をすることに決った。

話が後になったが、場所は神戸市灘区王子町二丁目の王子公園の中である。私鉄の阪急電車、西灘（に）に駅から北へ歩いて三分、国鉄の灘駅からは十分の所で交通の便は至ってよい。ここならば勤めの帰りに誰でも、ちょっと立寄れる所である。

さて、建設に必要な資金の四千五百万円だが、これは山岳連盟が建てるのだから、山岳連盟を構成する団体の会員の一人ひとりが、まず、できるだけ出し合って、その上に財界なり、果て市に補助金をお願いすることにして募金を始めた。兵庫県山岳連盟を構成する団体は五十八団体で、その会員は約三千六百員。一人一口、千円で三百六十万円、役員を併せて、四百万円を目標にして始めたが、どうやら最終には五百万円を超えた。財界関係からの募金も順調に進み、兵庫県三百万円、神戸市六百万円の補助金も決まり、昨年の七月末日に起工式をやって、八か月の工期を経て、本年三月末日には完成。

四月はじめに建物の引渡しを受けたと共に、一切を神戸市に寄付してしまつた。神戸市とは改めて、登山研修所の管理運営を山岳連盟に委託するという契約を双方で取り交して、四月二十六日に、ささやかな竣工式を挙げる事ができた。

名誉会員藤本九三氏からは全蔵書が資料室に寄託された外、各方面からの寄贈などで、充分な設備とまではいなくても、一応の設備はできたと思つてゐる。大集会室は映写設備と共に、会議用には約百名が収容できる机、椅子、その他の集会室にもそれぞれの椅子が配置されたし、書庫兼資料室には、二五〇冊分くらい、書架の設備、複写用に電子リコー、タイプライターまで備えられた。藤本さんの蔵書約一五〇〇冊は整理完了次第、目録を作ってから、利用に供される筈である。こうして五月一日から運営を始めたのであるが、その後の利用状況は、大小の集会室の利用と人工岩場の利用が主である。集会室は山岳関係の団体の利用は勿論、一般市民の団体にも供用するので、徐々に利用されるようになった。若い岩登り好きな人は岩場が夕方から夜にかけて結構利用されている。

都会の真ん中に岩場が出来たなどと報道され過ぎたために、岩登りの道場のごとき感じに一般市民にもたせた嫌らいがあつて、私達は少々当惑しているのだが、運営に、集会室、資料室、岩場などを併せて多角的に利用されることを期待して、やっていく予定である。

遠方の方々には宿泊設備があると喜ばれるのであるが、この研修所にはそれが無い。都心にあるということと共に、宿泊設備がないことも一つの特長である。管理の手間をできるだけ少なくして、設備を提供する。というのが

秘境 白頭山天池

白頭山探究登山隊々長 城山正三

豪華限定版 ¥3000

アジア大陸東方民俗。北方系日本民族の故郷。女真族の聖地。大陸治政のキイポイント。そして巨大資源と自然科学の宝庫として千古の謎を秘める白頭山。その頂上に鎮まる大カルデラ湖天池の神秘。科学者を中心とした154名の隊員による自然科学的総合探究の記録と、80数枚の写真に、歴史的地理的解説を加えた再び得がたい貴重な文献。登山家探検家をはじめ朝鮮中国、動植物、地理歴史、政治経済研究者に必読。

叢文社

東京都千代田区西神田1の4 電話 294-3959

探行録

この研修所の運営の基本方針でもあら。

今までのところ、遠来の見学者が相当数あり、各地方にもこうした施設が設けられる一つのきっかけになるような気配が感ぜられるが、もし、各地にこうした施設ができるならば、私達は望外の喜びであると話し合っている。

六月の二十一日には松方三郎氏のご来神の機を得て、「松方さんを囲む会」を催した。月末には、エベレスト隊のシエルバのチョタレとビンジュの二人を伴って、住吉、松浦、平の隊員諸氏、七月六日には大塚、平林の両隊員、十三日には韓国訪日訓練登山隊その一行、と来訪があつた。

七月十八日には、折柄、神戸市で開催中の五都市体育大会にお見えになつておられた秩父宮妃殿下には各種競技場をご視察の途中、ご休憩にお立ち寄りになった。宮崎会長以下お迎えしたのであるが、登山界の事情に深いご関心をお持ちになつておられることが、お話のあちこちに拝され、私共は深い感銘を覚えたのであった。

この登山研修所の運営はこれからの問題であつて、非常に大きな責任を感じているのであるが、会員諸兄には機会がありましたら、お立寄り頂き、ご指導を下さいますようお願い申し上げます。研修所の紹介の筆をおきます。

佐渡の支部長会議感想

東海支部長 熊沢正夫

第一回現地支部長会議といつても、特別議題の提示もないので、出掛けるのに少々臆助に思われた。しかし、そういうものに顔を出すのも支部長の役目であらうし、これを最初に引受けた支部の熱意に答えて道義感も手伝つて出席したわけである。

第一日は弥彦山の高頭仁兵衛翁肖像

前での『日本山嶽志』復刻記念式のところから、霧が霽れたつてきた青空の下で、参集者一同と祝賀懇親会。それから新潟経由、両津に渡り、支部長会議会場のドンデン山大佐渡ロッジへ車で登つて一泊。

翌日は石花越、松倉清水を経て石花登山口まで歩き、それから車で海岸沿いに平根崎、尖閣湾から遊覧船で達者に上陸、尖閣荘で一泊。

三日目は佐渡金山遺跡、佐渡博物館、新町の太一そば、妙宣寺、両津を経て新潟帰着のうえ解散となった。

自分の足で歩いたのは二日目の大佐渡口から石花登山口までの約十二キロであつたが、これが一番楽しかった。ハクサンシヤクナゲやレンゲツツジの茂るゆるやかな山なみ、牛の遊ぶ緑の草原、こういうところを既知人や今まで接する機会がなかった人々と談笑しながら、絶好の快晴に恵まれた人々、楽に歩けたことは誠に印象深かった。今回歩いた範囲の山道には、一組の青年男女が先行した以外に人に出会うことがなかったし、度の過ぎた商業主義に由来する目障りなものも見られなかった点は、特に気に入った。

近頃のちよつとした観光地では無作法な観光客で騒がしく、また、それを相手とする卑俗な商業主義が目につくのを知っている者には、これは全く意外という他はなかった。この状態が今後も永く続くことを願うが、果してどうであらうか。

今回の支部長会議には両津市・相川町当局がいろいろの支援を与えられたことは、佐渡の観光紹介の真意のあらわれであらうし、広く佐渡をPRする価値のあることは確かである。ただし、PRと共に、心ない観光客やそれに応ずる商業主義者たちから、この美しい佐渡の自然を守ることを怠らないように望みたい。

出掛ける前にはいささか気乗り薄であつたが、やはり行つてよかったと思つているし、今回の現地支部長会議という看板の交歓会は成功であつたと思つている。他の支部からの参加者は必ずしも多くはなかったが、越後支部関係の方が多数参加され、これらの人々と他の支部の参加者が隔意なくゆくりと起居を共にして交歓できたからである。

越後支部長以下多数の地元の方々のお骨折りや心からの御配慮に對し感謝しなければならぬ。それらの方々には支部長の要請にない義務的な仕事を分担したというような消極的な感じは全くなくあだかま支部長会議を利用して同志と気愛々に楽しんでいるようにさえ見受けられた。この点ひどく感心した。同時に羨し、思つた者は自分一人だけではなかったはずである。これは藤島支部長を中心として、この地方の岳人のまとまりと、この地方の人々の暖かい風風の反映ではなからうか。

秋田と荒巻先生

「スキー安全塔」建立によせて

秋田支部 保坂隆司

荒巻先生が秋田の地を踏めたのは大正六年のことである。秋田赤十字病院の二代目齒科医長として二十六才の若さで赴任されたのである。それから五十一年間、昭和四十三年十月故郷の千葉県流山市に帰られるまで齒科医として数々の業績を残されたばかりでなく、むしろ秋田県民にとってはスキーと登山の育ての親としての先生のイメージが強く残っているほど精神的な活動なされたのである。数えあげればきりがなが、秋田の雪に魅せられた先生は一本杖で県内のスロープをあさり滑り、大正十五年には秋田スキークラブを結成して秋田市に近い手形山ス

キー場の開発とその普及に尽力、昭和三年には県民協会のスキー部長となり、同七年、県スキー連盟を組織し初代理事長に就任、同十二年には全日本選手権大会を大館町(市)に誘致して技術向上に努力された。それから連盟会長として戦後まで秋田県スキー界を運営しその発展に努めてこられたのである。

戦後の一時、県卓球協会会長も同時につとめたことがあるが、昭和七年頃、日銀秋田支店に勤務されていた藤島敏男先生と知り合い、一緒にスキーや山に登ったことがきっかけで、登山にも強い興味を覚えた戦時中は毎年太平山祈願登山を続けられたそうである。そして、戦後、秋田山岳会を組織、昭和二十六年秋には県山岳連盟を創設して会長となり、スポーツ登山の普及発展に献身的に努力、同三十四年に日本山岳会秋田支部を結成して支部長に就任、そして同三十六年の秋田国体開催とまさにその情熱を山に注がれたのである。

このような先生の功をたたえられて昭和四十一年十一月三日、秋田県文化功労賞を受賞されたのであるが、翌年暮、一寸した病氣から息子さんといふ千葉へ帰えらるることとなったのである。しかし日頃から頑健な先生は、七十八才とも思えぬ若さで今なおゴルフに興ずるとともに、第二の故郷ともいふべき秋田の地が忘れがたく、五十余年間スキーを愛し滑り続けてきた記念と、誰れしもが五十年以上安全に健康に滑られることを祈念する「スキー安全塔」を独力で建立することを計画し、栃木県で緑玉を求め小畑秋田県知事の揮毫を埼玉県で刻み、今冬国体スキーの開催される田沢高原スキー場駒草荘側に立てられたのである。そして去る五月十五日、晴れあがった駒草岳をバックに各界多数の参列のもと「スキー安全塔」は無事除幕されたのである。秋田と荒巻先生を永久に結びつけ

図書室便り

昭和45・7

新刊図書受入報告

あかね書房寄贈

(1) 芳野満彦著『白い城砦』昭和45
(2) 『大島亮吉全集 5—大島亮吉研究—』昭和45

野島出版寄贈

(1) 高頭式編纂『日本山嶽志』復刻版
昭和45 (付録・日本山岳会編『越後の巨那様—高頭仁兵衛小伝—』)

朝日新聞社寄贈

(1) 安川茂雄著『バミールの短い夏』昭和45

足立源一郎氏寄贈

(1) 足立源一郎著『日本の山旅—足立源一博士エッセー帖—』茗溪堂 昭和45

白川義員氏寄贈

(1) 白川義員著『ALPS—白川義員作品集—』講談社 昭和44
定期刊行物受入報告

(部報・会報類)

(1) 関西大学山岳会ヒマラヤ委員会『アソナブルナIV通信』No. 2

(2) 山村民俗の会『あしなな』No. 121 (45・7)

(3) 小千谷山岳会『ハイザック』No. 28 (45・7)

(4) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 38 (45・7)

(5) 八王子海外登山研究会『海外登山研究』No. 3 (45・7)

(6) 国立公園協会『国立公園』No. 248 (45・6)

(7) 京都山岳会『京都山岳』No. 542 (45・7)

(8) 『長野県山岳総合センター所報』(1970・7)

(9) 東京野歩路会『山嶺』No. 483 (45

るもの、これが「スキー安全塔」でなく何んであろうか。

- 7)
- ⑩福岡山会『山と雪』Vol. 10, No. 4 (45—7)
- ⑪日本自然保護協会『自然保護』No. 97 (70—6)
- ⑫『登山歩流会会報』70-5/6 (45—7)
- ⑬日本登山協会『山と雪』No. 147 (45—7)
- ⑭日本登山学校『雪と岩』No. 23 (45—7)

〔雑誌〕

- (1) 『山と雪』No. 149 (1970—7)
- (2) 『山と雪』No. 278 (1970—8)
- (3) 『HIKER』No. 178 (1970—8)
- (4) 『山と雪』No. 383 (1970—8)

并書受入報告

Dr. Ferrante Massad 寄贈

1. "Cervino 1865—1965: Matter Horn-Mont Cervin" by Mario Fanini, Bologna, Tamari, 1965.
2. "Antaride" by Carlo Mauri, Bologna, Zanichelli, 1968

Journals Arrived in July 1970

1. "Alpinismus" 1970—6
2. "The American Alpine Journal" Vol. 17, No. 1, 1970.
3. "Der Bergsteiger" Jahrgang 37, Heft 6, Juni 1970.
4. "Deutschen Alpenvereins. Jahrbuch" Vol. 94, 1969.
5. "Deutscher Alpenverein" Jahrbuch 22, Heft 3, Mai/Juni 1970.
6. "The Himalayan Journal" Vol. 28, 1967—68.
7. "Österreichischen Alpenvereins" Jahrgang 25, Heft 5/6, Mai/Juni 1970.
8. "Panorama of Slovakia" 1970—2 & 4.
9. "Senderos" No. 136, Abril 1970.

10. "Verkehrsbuch" Ausgabe 41, Sommer 1970.

11. "東国山岳" Vol. 1, 1970.

図書委員会報告

七月九日 午後六時四十五分 図書室
村石、松村、武田、川上、大橋、山崎、室間、荻野、野上

(1) 第三回図書交換即売会について
期日 十月二十四日(土) 午後三時—五時

(2) 図書室管理について

蔵書数が増えたこともあるが、管理が乱雑になっている。

(p. 8—14)

図書交換会の期日がまぎりました。今から出品なさるものは整理しておいた方がいいと思います。図書管理の乱雑なことを指摘されましたが、全く図書の一貫した管理というものは私のようなものにはおしつづきそうに重く難しいものです。切目としようものがないうので、自分の息をつくひまがありません。(東)

大エベレスト展開催

日本隊世界の屋根に立つ「大エベレスト展」が本会、毎日新聞社、NHK主催で八月一日から十二日まで、池袋西武百貨店七階SSSホールで開かれた。一般公開に先立ち、七月三十一日午後二時から開会式が行なわれ、引きついで記念レセプションがあった。開会式のテープはヒラリー卿が切り、松方隊長、大塚登攀隊長らと熱心に会場をまわった。

会場入口中央には巾2m、長さ5mの夕日に輝くエベレスト全景大伸しのカラー写真が飾られ、色鮮やかに観客に強烈な印象を与え、また会場にはエベレストの登山史、その魅力、登山の意義が述べられたパネルが並び、地図文献、エベレストの模型が展示されて

その反対側には賑やかなシエルバの歌が流れる中に民俗衣裳をまとったシエルバの人形、民芸品、タバコ、コイン紙幣、蝶の標本、岩石などが展示された。

次のコーナーは氷河との闘いと題しベイス・キャンブからサウス・コルに至る登山隊の姿が展示された。アイスフォールでの苦闘、稀薄な空気との戦いなど困難に挑み続ける登山隊の姿を迫力あるパネルと実際に使用した各種の登山装備、テントの中から作戦会議の様子などのナマの音がテープで流れ実感を盛り上げていた。

八八四八mに立つという最後のコーナリは頂上に立つ登頂隊員の姿を人形で中央に置き、そのまわりを巾2m、長さ22mの大パノラマ写真でぐるりと取りまき、絶頂から三六〇度の眺望を再現、あたかも頂上にいるかのような感じをたくみに作りあげ、さらに登頂隊員とABCとの交信記録もテープで流した。

この展示展には、藤田、田村、平野士郎、長田、神崎、嵯峨野、大森が最初から企画に加わり、こまかな点まで配慮し、かざりつけには開会前夜徹夜で頑張ったことを付記する。(大森薫雄)

新旧役員懇談会

新旧役員懇談会が七月二十二日午後六時半から上野の蓬萊閣で開かれ、退任役員の労をねぎらい種々懇談した。

ソウル大OB 隊歓迎会

ソウル大学校文理科大学OB山岳会訪日登山隊の歓迎会が七月十日午後七時から本会ルームで開かれた。ソウル大孫錫錫隊長ほか九名が出席、本会々員と種々話はずんだ。会員出席者十

九名。

第二六一回小集会

第二六一回小集会は七月十五日午後六時半から本会ルームで東京外語大教授小沢重男氏(会員)の「モンゴルハルヒール連峰について」と題する講演があった。美しいスライドが上映され、珍しいモンゴルの山の話は戦後初めてのもので感銘深いものがあつた。出席者二十三名。

婦人懇談会集会報告

七月二十一日、エベレスト登山隊に紅一点として参加された渡部節子さんにスライドとお話をして頂いた。

テレビに、新聞に、登山隊の写真を今まで沢山見て来たが、渡部さんのはそれと違ったフントムードの写真で面白いのが沢山あった。愉しかったキヤパン中のこと、サウスコルへ登ったときのこと、空腹で、隊員が食糧テントにバケツを持ってこそ泥に来る話、皆の質問に新聞には報告されていなかったゆかいな話が尽きなかった。合わせて毎日新聞から借りて来られたスライドもみせて頂いた。女性一人だけで参加され、困難なことも今となっては愉しい思い出として明るく話される渡部さんは人間が大きくなったのもしく感じられた。参加者二十一名。(婦人懇談会委員 斉藤桂)

外務省領事館課からの要望

最近ヨーロッパ・アルプスで日本人登山者の遭難事件が続発し、地元関係者ならびに在スイス領事館では、そのほとんどが事後連絡のため、処理に困難をきたしている現状である。日本山岳会としてもこの対策について協力

してほしいね、このほど外務省領事館課から要望があった。

本会々員で今後ヨーロッパ・アルプスに登山される場合には、行動概要、氏名、ならびに不在中の連絡先を本会あてご連絡されるよう協力方を願ひ申し上げます。なお現地大使館、領事館への事前連絡も必ずとっていただくようお願いいたします。

東京都岳連から海外登山手続きについての連絡

最近ますます海外登山が盛んになってまいりましたが、それとともに手続きも複雑になり、都岳連、日山協、外務省と提出書類や部数も違ってきております。

このことにつきまして都岳連海外委員会では、バキスタン、ネパール、中華民国台湾省への登山に際しましての提出必要書類を次のように定めておりますので皆様に御協力いただいておりますが、ここに改めて御通知申し上げます。なお日山協への書類の提出は都岳連経由となります。また台湾省には五ヶ月前までに御提出下さるようお願いいたします。

記

一、推薦状交付申請書 一部
二、計画書 一部
三、誓約書 一通

または遠征隊のすべての責任の所在を明確にした書類

四、推薦料 都岳連加盟団体 一〇〇〇円

都岳連と関連ある団体 三〇〇〇円

五、事後報告 帰国後の遠征報告書の提出

昭和四十五年七月二十九日 都岳連海外委員会 各加盟団体殿

アイスピックル献上の礼状

ネパール皇太子成婚式にあたり、本会はそのお祝いとして特別製アイスピックルを献上したのをそれになじ、次のような礼状が来った。

Secretary of Royal Palace
H.R.H. The Crown Kathmandu
Prince of Nepal. Nepal.
June 30, 1970.

Dear Mr. Yukio Mita,
His Royal Highness the Crown Prince has commanded me to thank you and, through you, all the Japanese Alpine Club for presenting an ice-ax which according to your letter of 9th June 1970, was especially made in memory of the Everest Climbing Team of the Club in May, 1970.

With respectful regards,

Yours Faithfully,
Signed
/Chiran S. Thapa/
Deputy Private Secretary
to

H.R.H. the Crown Prince
Mr. Yukio Mita, President
The Japanese Alpine Club

インド隊から毎日グラフィ
の礼状

本会はインド・エベレスト隊へ毎日グラフィ・エベレスト特集号を贈ったがそれに対し七月十日付次のような礼状が来った。

Commander Kohli, Major Ahluwalia and I were thrilled to receive the fine booklet you have brought out on the Japanese Everest Expedition. The photographs in it are of extremely good quality, and the speed with which

you have brought out the booklet is a tribute to your efficiency.

We were extremely happy to meet members of many of your expeditions this summer. By their team spirit and courage on the mountain they have left a deep impression on all of us. In this connection you may be interested to see a talk I gave on the All India Radio about "Mountaineering in 1970". I do not believe that any country has so far sent so many expeditions to the Himalayas in one year as you have done this year, and your achievements would be very difficult to match.

With kind regards and best wishes,

(H.C. Sarin)

Mr. Y. Mita,
President
Japanese Alpine Club,

ルーム日誌 (45年7月)

- 1日(水) 理事評議員会
- 9日(木) エベレスト登山隊打合せ
- 10日(金) ソウル大学校文理科大学O
- 11日(土) B山岳会訪日登山隊歓迎会
- 14日(火) エベレスト経理関係打合せ
- 15日(水) エベレスト経理関係打合せ
- 15日(水) 第二六一回小集会「モンゴルハルヒール連峰について」小沢重男東京外語大教授
- 21日(火) 婦人懇談会
- 七月中来室者五〇二名

改姓

四九三〇 榮 源太郎 旧姓山浦

代表者変更

四八五一 朝日生命保険相互会社山岳部代表 朝久野昭司

物故者

二三七 冠 松次郎 昭和四五・七・二八逝去

六〇一六 四方山 靖 昭和四五・六・二逝去

チェコからバッジ交換の希望 チェコスロバキアの自称「熱心な登山家、旅行家」という人からクラブ宛に、登山バッジ類を交換したいという手紙が届きました。先方からはチェコとブルガリアのバッジを送れるそうです。希望者は左記と直接コンタクトしてください。

Mr. Gerald Deistler, 699, Luby u Chebu, Czechoslovakia

日本山嶽志覆刻版頒布

本会創立発起人の一人である故高頭仁兵衛翁の著、明治三十九年発行の「日本山嶽志」の覆刻版が、新潟県三条市の野島出版から発行されました。千部限定出版で、原本とすべて同じ体裁です。付録として同封してある「日本山岳会設立趣意書」もそのままの型で入っております。

また別冊「越後の旦那様」は越後支部長藤島玄氏の苦心の作で、高頭翁に関するすべてを網羅したもので登山史上から見てもきわめて貴重な解説書です。

今般、仁兵衛翁の孫に当る高頭寿久

氏より、本会へこの複製版を百部寄贈していただきました。本会では、これを有志に頒布しその売り上げを会の基金としたと考えております。定価四千八百円のところ、とくに会員に限り四千五百円（送料二百円）でおわけしておりますので、希望者は至急ルームあて、代金、送料をそえてお申し込みください。

カラー 슬라이ド

「エベレスト登頂」発売

毎日新聞社では毎日カラー 슬라이ド「エベレスト登頂」を企画・製作しました。このスライドは三五ミリ判三十六コマの解説書つきで、定価四五〇〇円のところ、会員にかぎり送料とも四〇五〇円（一割引）でおわけいたします。希望者は至急本会ルームあて、または別送した申込書で毎日新聞社のほうにお申し込みください。

おもな内容Ⅱカトマンズの街かど 栄光をめざすキャラバン 美しいアマダプラムの遠望 ロブチェからゴラクシャップへ 日本山岳会村の設営 隊員とシェルパ全員 高所用の装備 巨大なアイスフォール アイスフォールに挑む 前進基地 サウス・コルの夕景 南壁に挑戦 感激の登頂 続いて二次隊も登頂 頂上からの大パノラマ（現金引換え）

お知らせ

◇「山の花のスライドとお話」九月二十八日午後六時半、ルーム。講師会員 宅間清子氏。
◇「現地小集会」十月三日、四日。喰べ、飲みほうだい。富士五湖西湖。詳細はルームへお問い合わせ下さい。
◇「フランス隊ジャヌー登頂映画会」十月六日午後六時半、赤坂溜池交差点

ガストンの山岳書店

店主・L.C.ボーム(英国山岳会員)

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案内書、特殊地図、版画なども取扱っております。型録その他のご照会、お申込みをお待ちしております。

宛名 "GASTON'S ALPINE BOOKS"
134 Kenton Road, Harrow Middlesex,
HA3. 8AL. England
(なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr. Ichiro Yoshizawa は、私の親しい友人です。)

フランス貿易センター(八階)、無料。
◇「尾瀬でナメコを喰べる会」十一月一、二、三日、尾瀬第二長蔵小屋へ十一月一日午後四時集合、参加希望者は十月十五日までルームへ。
◇「会報合本特売」会報二五一号〜三〇〇号合本八十部出来ました。特価三千円(送料二百円)希望者はルームへ至急お申し込み下さい。

昭和四十五年九月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三二二 向井ビル
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎安治

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
振替口座東京四八二九番
株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (251号〜300号) 金 700 円也
送 料 別 受 け 金 120 円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2〜15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1〜15、電話(731)7331(代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話 (352) 1556・1557

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

新刊

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖〈A変型208頁〉定価3,600円
日本列島の北から南までのさまざまな風景が著者の淡彩の筆によって、いきいきと描き出されているスケッチ集

私には後にも先にもたった一つの自分の山の本がある。
「霧氷園」、1941年版。先生の装幀がこの本を飾った。内容はつまらなくても、おかげでそれは生涯の記念碑となった。これも図々しく、お人柄に甘えて、ただで描いていただいたのである。絵に添えた先生の文章にも定評がある。力まず、てらわず、淡々として、しかも山の心に通じ、山の心をみごとに語っている。半世紀にわたる先生の山旅の収獲の一部が、いまこの本にまとめられた。これこそ、ほんとうに山にうちこんだ、ほんとうの山の画伯のすばらしい贈りものではないだろうか。

袋一平・山のアルバムより――

新刊 山に忘れたパイプ

藤島敏男著―――〈菊判584頁〉定価2,500円
登山半世紀をはるかに越える著者のよき時代の静かだった山旅から現在までの山登りの紀行を中心に収録。―――

本書の内容は、随想、紀行、追想、訳章、書評、山のたより、登山譜、の七つからなっている。その一つ一つをここに説明する余裕はないが、大正期からつい最近まで、主として日本山岳会の刊行物に発表されたものが大部分を占め……著者は「だいたい私は我儘者だから、依頼だの注文に応じて文を綴るのは、平にご勘弁を」と言っているように、本書の大部分を占める文章は、書きたいことを気のむいた時に書いたもので、それだけに、どの一つをとり上げても、この著者ならではの感を強く受けるものである。

望月達夫・藤島さんの本より――

登山・スキー用具専門店

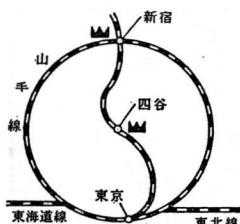
●買い易い
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4丁目

香山荘

登山とスキー具
プライス
リスト進呈

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店: 中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店: 中央区銀座2-4-4 (561)0966・スキー店
大阪店: 北区曾根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
神戸店: 生田区北長狭通り3-8-19 (39) 4126
神戸店: 生田区三ノ宮町1-32-1 (33) 5251
福岡店: 須崎町1-4 (28) 3440